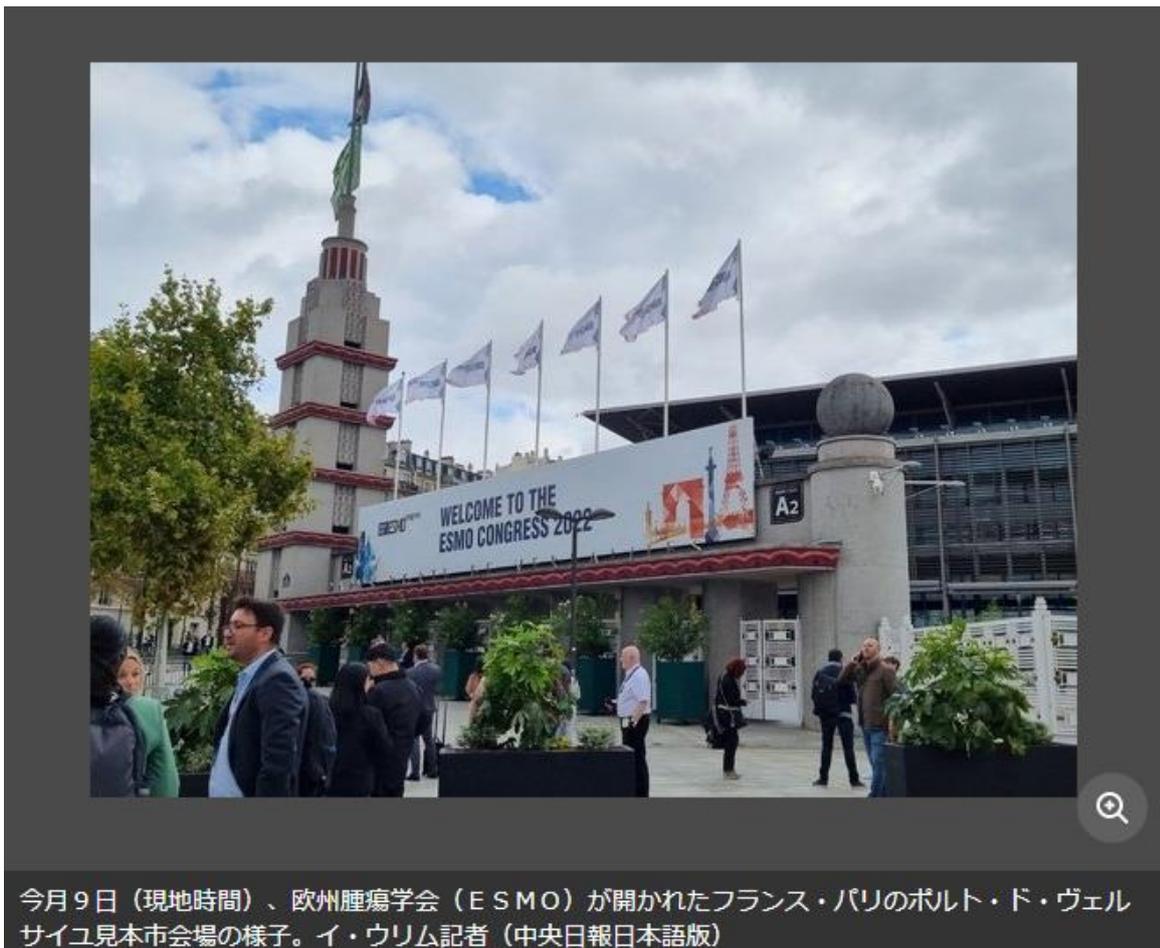


フランスがん学会2万人…妊婦もつけなかったマスク、韓国人記者だけがつけた
2022/9/19 中央日報



「しばらく検査があります。両側に並んでください」

今月9日午後1時（現地時間）、フランス・パリに位置するポルト・ド・ヴェルサイユ見本市会場。この日は世界3大がん学会の一つである欧州臨床腫瘍学会（ESMO）が公式にオープンする日だった。野外入口にエクスポ会場に入ろうとする人が大勢集まると、案内職員が順に並んでほしいと言った。韓国であらかじめ準備した新型コロナウイルス感染症のワクチン接種証明書を準備しようとしたが、いざ職員たちはカバンの所持品検査だけをした。凶器や爆発物など危険なものがあるかどうかを調べた後、制止もなく人々を送り込んだ。ESMO側は事前電子メールのお知らせで「学会に参加するためには新型コロナに感染した後、完治したり少なくとも1回以上ワクチン接種を受けたりしなければならない」と明示したが、実際の現場では関連内訳を確認しなかった。発熱チェック、手消毒、マスク着用を勧告する文句も見当たらなかった。

世界腫瘍学専門家や臨床専門医、製薬関係者など2万人余りが集まり、5日間開かれた学会は韓国と全く違う風景だった。フランスの現地防疫指針通りに屋外はもちろん室内でもマスクをつけた人がほとんどいなかった。ホールにはコーヒーカーが立てられており、展示場の簡易椅子ではサンドイッチとコーヒーを楽しむ人が簡単に目についた。プレスセンターには腕を伸ばせば触れるほどの間隔で記者たちがぎっしり座っていたが、皆マスクなしで自由に通話して飲み物を飲んだ。妊婦発表者はマスクをつけないまま1時間質疑応答を続けた。韓国から来た新型コロナの未確認記者3人だけが「不思議の国のアリス」のよ

うにマスクをつけていた。

OECD主要国はこのようにマスク着用義務が消えている。医療施設や公共交通機関、福祉施設で着用義務が維持されるだけだ。最近、チョン・ギソク国家感染症危機対応諮問委員長が「出口戦略に対する準備が必要だ」と主張したのも、このような海外状況を考慮したものだ。米国やデンマーク、フランスはマスク義務化を廃止した。フランス出張期間中に博物館、百貨店、公共交通機関、タクシーの中でもマスクをつけている人はほとんどいなかった。

パリ14区にあるホテルの職員は、「春（3月）からマスクの義務化が廃止された」とし、「今年7月に突然感染者が増加した時にしばらくつけただけで、今はほとんどマスクをつけていない」と説明した。新型コロナ感染への懸念に関する質問には「よく手を洗うなど、それなりの防疫を守っている」とし「実は、私たちの周りにはもっと危険な他の疾病がたくさんある。新型コロナに過度に恐怖感を持たないように努力している」と述べた。

国際統計サイト「アワー・ワールド・イン・データ」によると、16日（現地時間）基準でフランスの人口100万人当たり新型コロナの一日新規感染者は308人で、1055人の韓国の3分の1水準だ。人口100万人当たりの一日新型コロナの死亡者は0.43人で、0.97の韓国の半分程度だ。

だからといってフランス人全員が政府の防疫政策に賛成するわけではなかった。米配車大手Uberを通じて10回ほどタクシーを呼んでみた結果、2人のタクシー運転手はマスクをつけていた。このうち1人は料金をやり取りできるようなスペースだけを開けたまま、前の座席と後部座席を分離するビニールシールドを張った。該当記事は記者と同乗した1人がマスクをつけていなかったため、つけてほしいと先に要請したりもした。フランスに来て最初で最後にマスク着用を要求された日だった。また「新型コロナの感染を予防するため」と感謝のジェスチャーをとってみせた。マスクをつけていたほかのタクシー運転手は「お客さんにはマスクをつけてほしいと要請するのが難しく、自ら使っている。様々な国から来た観光客が多いので、仕事をする時に不安なのは事実だ」と話した。